

魅せられて

ロード

私の「歌」道標

うたは思いのジグソーパズル



松平盟子

子どものころは何かと身のほど知らずな夢をもつもので、もって許してもらえるのが特権だ。小学校時代、自分の将来の希望を書くようにとのお定まりの作文に、私は作家になりたいと書いた。しかもジュール・ヴェルヌのようなSFのという、たいそう背伸びした書きようだった。

もちろん子供の夢だから何を願っても所詮しうせんされたものである。が、ひとつ誤算があった。作家になりたいと書くころから、私は作文につじつまだけ合わせて小さな作り事、嘘うそを紛れ込ませるようになったのだ、ほとんど何の罪の意識もなく。ジュール・ヴェルヌのような小説というのは、つまりは空想を飛ばたかせて、こんなふうだったらすてきだなと夢見、期待する世界を描くことだった。実際にはなくても、いやないからこそ現前に見えるように自分の想いをデッサンしたい、夢の代償。先生は「あったことをそのまま、感じたことをそのまま書けばいいんですよ」と教えてくれたが、そんなことがどうしておもしろいのか。小学生の私は心の中で不満だった。そしてなんだかいやだった、体験をそっくり記録するような文章なんて――。

書くという行為は、私にとってけっこう楽しいことだった。心に浮かぶ思いや想いを、言葉という小さなピースをひとつひとつ寄せ集めて完成させる、ジグソーパズルにも似た行為。そこにびったり合わないピースは、いくら当てはめようたって、これは無理で、うまく合うのを探し出すのが書くという意味だった。

もちろん当時はそんなふうにはちゃんと考えたわけではない。もっと漠然と、自分にとってどうであることが意にかなない気持ちにしくりくることなのかを感じていただけなのだった。その姿勢はたぶん今に続いている。

さて、短歌との出会いについて。私にとって短歌は、書くという表現手段の一つであり、それも偶然の選択だった。もっと言えば、書けさえすれば短歌でなくてもよかった。それがどうして二十年近くも短歌なのか。

近ごろ私の友人が、ある小説で新人賞を受けた。彼女は「あきっぱい私が苦節十年もしちゃった」と笑っているが、私より七歳若い友人のことばを聞くと、もし私が小説を書いたら苦節二十年していたかもしれない、とも思う。あるいはシナリオに進んでいたか

もしれないし、作詞をめざしたかもしれない。文楽などの古典の新作公募に挑戦したかもしれないし、童話に手をそめていたかもしれない。なんにしても書くことで自己実現しようとしたらうか、書く行為によってしか深いところでの満足は見いだせなかったような気がする。

そんな私が短歌と握手したのは大学四年生になる春休みだった。大学生活はあと一年しかない。そのやや追われるような思っていたころだった。

それまで大学の同人雑誌で小説めいたものを書いてきたが、いまひとつ自信をもてないままに中途半端な気持をもてあましていた。学園紛争も入学当時には収まっていたし、ぼんやりと平和穏やかな空気に浸っていると、なんだかやりきれないような気分でいっぱいになり、そして淡い恋も手痛い恋も私を救ってくれないことに絶望感を感じていた。そう、私は自分がどんな人間なのか、何をしていいのかわからなかったのだ。ただわかっていたのは、書くことにずっとたずさわっていたというヒリヒリするような憧れと渴望だった。けれどなにをどう書いていいのか、その発端を見いだしかねていた。心のうちは大波小波がいつも揺れているのに、私はあまりにも幼稚で無防備で、世界は彼方(かなた)の波濤(はとう)のように遠いところに霞(かすみ)んでいた。

そんな心持ちでいるときに、書店で何げなく月刊の短歌雑誌をめぐって驚いた。何にかというと、巻頭の作品群があまりに瑣末(さまつ)な日常報告的な内容だったのだから。であるのに、後のほうの文字のポイントの小さい、たぶん若いんだらうなと思われる人たちの作品には、初々(うぶ)しく不思議に心ひかれるものがあった。そういえば、と思出したのはクラスメートが話していた塚本邦雄という歌人とその

作品についてだった。国文科の学生は和歌を読む機会がけっこうあるから、そんな折に話題になったのだから。そこに詠まれた意味はよくわからなかったが、美意識に貫かれた言葉の綾(か)なす世界は、ちよつと麻薬にも似た恍惚(こうご)感があった。やってみようかな……。そんなところだった、短歌を作り始めたきっかけは。

そういえば短歌雑誌に出ている結社にも驚いた。結社という組織があつて、そこで勉強するものらしい。「明星」とか「アララギ」というのは文学史で習ったつ。新聞投稿で短歌を始める人が多いと聞くが、私はそういうことをしたことがなく、とりあえずどこか結社というものに入ってみたら、様子がわかるかもしれないといったほどの気持だった。こうして「コスモス短歌会」に入会した。

私にとって短歌は、内にたゆたいうねる得体の知れない何かに形を与えることだった。思いが沈み思いが浮き上がるその勢いを言葉に置き換えることだった。そして私は自分にびつたりの歌のスタイルを一刻も早く見つけたかった。なかなかうまくいかなかったが、まれに想いのジグソーパズルに言葉がなんとか収まると、本当にうれしかった。短歌のような形のある詩形は、ジグソーパズルの機能をそもそも持っているのではないか。

鈍色(にぶいろ)に地の濡れゆけば髪冷えてかすかに 重き朝、秋に入る

四年生のころの歌をこうして引くと、ああ遠くなったなあと思う。現代短歌について正直なところ何も知らなかった。人に聞いたり雑誌で読んで少しずつ理解していった。

卒論を書き終えたのが一月半ば。春からは愛知県の高専学校教員になることが決まっていた。それまでの二か月ほどの間に作ったものを角川短歌賞に応募した。三月末日の締め切りギリギリに郵送して、学生生活にさよならした。

一九七七年、春。新米教員は毎日が緊張の連続で、慣れない役割をにわか仕込みで演じている自分を、どこかで悲しく見つめている自分がいた。私はどうして教員をしているんだろう。こののち五年間も勤めながらずっと抜けることになかった感覚だ。

一方、まだ新任研修も終わらない六月に、私は角川短歌賞受賞の知らせを受けた。うれしいと同時に新米歌人は、またおたおたした。どうしよう、歌人になっちゃった。教員と歌人の二つの切符を手渡され、なにがなんだかわからないまま人生の汽車に乗り、揺れる車両から窓の外を眺めてしばらくぼんやりしている、といった感じ。もし途中下車したら、前途無効でそこに突っ立っていなくちゃいけないだろう。それならともかく乗ってしよう。

でも心の奥でわかっていて。私は仮に教員の切符を無くすことはあっても、歌人の切符は手放さないと。また願っていた。歌人の切符を手にしたままで、別な切符も手に入れない。それは書くという行為に直接に結び付く何かだった。

一九七九年九月。今は亡き政田岑雄さんの勧めで書肆季節社から最初の歌集『帆を張る父のやうに』を刊行した。

目をつむり髪あらふとき闇中にはだいろ

ゆふがほ髪ふかくひらく

君の髪に十指差しこみ引きよせる時雨の
音の束の如きを

ものかげかさなる路地に脈うちて水音
す紺の朝顔ひらく

水面へうつむきひらく紅椿みづの裡より
みひらきてゐる

ひとりて歌の選をして並べる順序も決めたので、今みると、もうちょっとなんとかならなかつたのかと思うほどの未熟な歌が混じる。ある日突然、歌人となった私は、励ましあつて歌を作る友人も、その稚拙さを的確に指摘してくれる人もほとんどなかつたような気がする。きれいに刈り込まれ整えられた歌集でないと、ころに不満が残るが、見方を変えると自分の原点と欠点がよくわかつて、それはそれでよかつたのかもしれないと思う。

当時はいろいろな意味で余裕がなかつた。自己嫌悪と慢心が振り子のように極端から極端へ揺れ、なんだかいつも疲れていた。生まれて育った故郷から独り立ちして自分を見つめたいと思いつながら、自立する手立ても勇氣もなかつた。私は本当に歌人なのだろうか、これからも歌人であり続けるのだろうか……。答えのない疑問符を並べたてて、迷いの浅瀬と淵を往還した。

松平 盟子 (まつだいら・めいこ)

一九五四年七月二四日、愛知県生まれ。
一九七七年、南山大学国語国文学科卒。
同年、第23回角川短歌賞受賞。

「コスモス短歌会」を経て、
一九九二年「プチ★モンド」を創刊。

歌集に『帆を張る父のやうに』、『青夜』、『シュガー』、
『プラチナ・ブルース』(第一回河野愛子賞受賞)
『たまゆら草紙』がある。

雪の夜を猫と後らう玉響のこの星くすの心と
よき愛あり
抑しひらくらから暮に秘められて万の桜はふ
るえつつ暖く
今日にして白金のいのちすててゆくさくらさ
くらさぐへの深さ
ロゼンヤンソンさやささやと飛泡す生まれ
ら星と死ぬ星の音
パリ二匹の国王図書館へ水無月のバスわれり
乗せゆく

松平 盟子



1994年6月、パリのマルシェ(市場)にて。パリ在住時代の与謝野晶子についての現地調査や、ワインの本場ということで松平さんはこれまでも数度フランスを旅している。(松平さんはワインに造詣が深い)

弱音を吐くと自分が支えられなくなりそうだと怖くて不安だった二十代を、私は短歌のおかげでなんとか乗り切れた。短歌でなければ別の書く行為に二十代を費やしていただろうが、それで少しも目の目を見ること^がなかったら、もつと暗澹^{あんたん}とした気持で毎日を送っていたのは間違いない。

では三十代は？ 本当のところを言えば、ひととき短歌すら捨てようと思った。もつと具体的に言えば、不器用で体力のない私は結婚生活と両立できなかったのだ。文字に飢えて自由に餓えて、これまでの生涯でもつとも孤独だった。自分を生きていないという苦痛に極限にまで苛^{さいな}まれ、短歌以外のすべてを捨てた。私のエゴは私を生かすために多くの犠牲を強^しいたのだった。それについての責めはいくらでも負うが、ただそうしなければ私がいまのように健康に四十代を迎えられたかどうかかわからない。

短歌はときに命綱となり、ときに余裕の綱となった。いまなんとか身過ぎ世過ぎの暮らしを続けていられるのも、短歌と握手して以来、この手を放さないできたからにはかならない。そうして私は、あいかわらず「あったことをそのまま」書くこともせず、思いのジグソーパズルに飽くことなく言葉のピースを当てはめているのだ。